

2年間でフランス語文法をどのように教えるか？

山川 清太郎

Université d'Economie d'Osaka

bpr5000?saturn.dti.ne.jp

0- はじめに

フランス語文法の教科書の多くは、初めに「Alphabet (アルファベ)」が書かれており、最後は「接続法大過去」の項目で締めくくられている。最後のページに至るまでには「発音の規則・冠詞・複合過去・半過去―大過去・単純未来―前未来・条件法・接続法 etc.」と非常に多くの項目（学生の立場からすれば難関）が待ち構えている。外国語大学の専門課程の学生であれば別として、非語学系の学生が、第2外国語のフランス語の授業で、1年間でフランス語文法を理解することは果たして可能なのであろうか。

メインの非常勤先である大阪経済大学では慣例として、1年次に指定教科書でアルファベから接続法大過去までのすべての文法項目を教え、2年次には文法の枠組みの中で教員の裁量に任された授業を行っていた。4月の授業開始時に前任教員からフランス語文法を全て学んだであろう2年次の学生に、フランス語レベルを測る意味で試験を行ったが、案の定学生のフランス語レベルはゼロに等しく、むしろ学生にフランス語アレルギーを植え付ける結果しか残していなかった。そこでこの慣例を破り、1年次の授業では2年間という長いスパンで文法の授業を行い、学生が「無理なく、着実に」学べる授業を行った。以下は2年間の授業報告である。教科書は2年間にわたり、「クラルテ（文法編）」（白水社・京都外国語大学フランス語研究室編）を用いた。

1- 1年次春学期の授業

1年次春学期の授業テーマは「« Le français à partir de 0 » ゼロからのフランス語」、学期目標は「フランス語の基本を理解する」である。下記の授業進度表を見ると履修内容はそれほど多くはない。しかしながら、2年次秋学期まで続くフランス語授業の礎となる項目ばかりである。そのため授業の「進度」を落とし、かわりに「深

度」を重視した。また授業の最初 20 分を用いて小テスト＋解説（復習）を行うことで学生の理解度・定着度を高めた。尚、授業は全て PowerPoint を用いて行った。

月度 [授業数]	授業内容
4月 [2]	Introduction, 発音 (アルファベ～母音)
5月 [5]	発音 (鼻母音・子音・テスト) + Leçon 1 (名詞の性・数, 冠詞, être, avoir)
6月 [4]	Leçon 2 (-er動詞, 疑問・否定形, 否定のde, 品質形容詞, 数詞1-20)
7月 [2]	春学期内容復習, 最終試験

第 1 回目の授業では「フランス語をはじめよう！」と題して、フランス語・フランス語圏の概要について授業を行った。文法教科書の欠点として、文化情報の少なさを挙げる事ができよう。第 2 外国語としてフランス語を履修する学生はフランス語・フランス語圏に対して多くのイメージを抱いていない。そのため、授業に対するモチベーションが上がらず、フランス語の理解度も下がってしまうのではないだろうか。授業後に学生に授業の感想を書いてもらったが、「フランス語が世界中で話されていることがわかった」など、概ね評判は良かった。

春学期最初の難関は「発音」である。フランス語の発音がわからなくなると、理解できない→授業がつまらない→欠席…となってしまう。そこで授業 3 回分を発音中心に当てて単語・文 (リエゾン・アンシェヌマン含む) を読めるように指導を行った。また学生の理解度を測るための小テストとして、発音の項目に掲載されている単語 (約 100 語) をスライドにランダムで映し、学生に音読させた。

次の関門はフランス語の 3 大動詞 être, avoir, -er動詞である。実は1年次春学期に教える動詞はフランス語動詞の 9 割強を占めている。この 3 動詞を教えた後、学生にはこれら 3 種類の動詞を用いることで自己紹介または他者紹介の表現を教えた。

Bonjour! Je m'appelle Tetsuya MIYAZAKI. Je suis japonais. Je suis étudiant. J'ai dix-huit ans. J'habite à Osaka. J'aime la musique rock et le football...

2- 1 年次秋学期の授業

月度 [授業数]	授業内容
10月 [5]	春学期試験の解説, Leçon 3 (指示・所有形容詞, 前置詞＋定冠詞の縮約, faire, prendre, mettre, dire, 命令法), Leçon 4 (-ir動詞)
11月 [4]	Leçon 4 (疑問形容詞, 非人称構文, 補語人称代名詞 I, 時間表現), Leçon 5 (補語人称代名詞 II, 強勢形代名詞, aller, venir)
12月 [4]	Leçon 5 (近接未来, 近接過去, 数詞21-100), Leçon 6 (過去分詞,

	直説法複合過去, 比較級, 最上級, 季節名)
1月 [3]	秋学期内容復習, 最終試験(試験期間中)

秋学期の授業目標は「身の回りのことや出来事について述べられるようにする。」である。秋学期は授業進度を早めたが、授業最初の20分を用いた小テストと試験解説(復習)は秋学期も維持させた。

秋学期には動詞として *faire, prendre, mettre, dire, croire, voir*, 第2群規則動詞(-ir動詞), *aller, venir* を扱った。多くは不規則動詞であるが、1~3人称単数の活用語尾が[-S, -S, -T]型(*faire, dire, croire, voir*), [-S, -S, -なし]型(*prendre, mettre*)に分類するなど、「不規則動詞の中の規則性」を学生に伝えることでフランス語動詞の活用を理解させるよう努めた。

12月に入ると *aller, venir* を用いて基本的意味(行く・来る), 近接未来・過去を教え、直説法複合過去へと進んでいく。春・秋学期で学んだ動詞と複合過去時制を用いれば、学生は自らの「過去の行動」を表現することが可能となる。そこで「昨日(週末)の出来事を書いてみよう。」と題した作文を行った。

J'ai mangé au restaurant. J'ai pris trois cours. J'ai fait les courses au supermarché. J'ai vu Sachiko à la gare. Je suis allé à Kyoto. J'ai regardé la télévision.

3- 2 年次春学期の授業

月度 [授業数]	授業内容
4月 [4]	Leçon 6 (過去分詞, 直説法複合過去 [復習]), Leçon 7 (関係代名詞 I, 強調構文, 指示代名詞, 受動態), Leçon 8 (代名動詞)
5月 [5]	Leçon 8 (疑問代名詞, 疑問副詞), Leçon 9 (直説法単純未来, 直説法前未来, 関係代名詞 II, 不規則動詞 (<i>savoir, pouvoir, vouloir, devoir</i>))
6月 [4]	Leçon 10 (直説法半過去, 直説法大過去, 中性代名詞), Révision 1 (直説法時制復習, 現在・複合過去, 単純未来, 前未来, 半過去・大過去, [単純過去・前過去])
7月 [2]	Révision 1続き, 春学期内容復習, 最終試験 (試験期間中)

2年次春学期は直説法複合過去の復習から始まり、単純未来・前未来、半過去・大過去、(単純過去・前過去)を教えることで、学生は直説法すべての時制を習得することになる。

条件法・接続法の習得の前に Révision (復習)として直説法時制の習得を図った。

直説法の時制を学ぶと、学生は日常生活の事柄を現在・過去・未来にわたって表現することができる。そこで学生に過去の状況（半過去）や行動（複合過去）、将来の事柄（単純未来）を述べる練習を行った。

J'étais chez moi. J'ai écrit une lettre. J'ai regardé le match du football.

J'irai à Kyoto. Je serai content. J'achèterai une cravate. J'écouterai de la musique.

4- 2年次秋学期の授業

月度 [授業数]	授業内容
10月 [5]	Révision 2 (関係代名詞, 補語人称代名詞, 数詞)
11月 [4]	Leçon 11 (条件法現在, 条件法過去, 現在分詞, ジェロンディフ), Leçon 12 (接続法現在, 接続法過去)
12月 [3]	Compréhension sonore
1月 [2]	秋学期授業復習, 最終試験 (試験期間中)

2年次秋学期には、学生が難しく感じた文法項目として、関係代名詞、補語人称代名詞、数詞について復習を行った。この項目については再度教科書を用いて説明を行った後、「フランス文法練習帳」（青木啓輔、西川直子著・白水社）を使用し、練習問題を解いていくことで学生の理解度を高めた。

11月に条件法・接続法と全ての文法項目を終えたので、12月の3回分の授業でリスニングの練習を行った。学生が仏検を受験したいという申し出から試験対策の一環として行った。内容はダイアログ（またはモノログ）を聞き取り、文章を書き取るディクテ方式を採用した。以下はダイアログの一例である。

Pendant les vacances

Paul: Salut Marie! Ça fait longtemps! Qu'est-ce que tu as fait cet été ?

Marie : Je suis allée en Italie. J'ai étudié l'italien 1 mois. Et toi ?

Paul : Moi, je suis allé à Paris.

Marie : C'est bien ! Où est-ce que tu vas faire à Noël ?

Paul : Je vais rentrer chez mes parents.

Marie : Moi aussi, je vais rentrer dans ma famille. Salut !

文法の授業では、学生は「文字」としてのフランス語に接する機会は多かったが、「音」としてのフランス語に触れる機会は少なかった。そのため、音には表れない「過去分詞alléの女性形 allée」や「名詞 parent の複数形 parents」、逆に文字には表れていない「リエゾン cet été, Je suis allé」などの聞き取りは難しかったようだが、2回

目、3回目の授業と回数を重ねるうちに、学生はフランス語の音と綴り字の関係を理解してきたように感じた。

5- おわりに

フランス語に限らず、語学の習得には「*Spirale*」（らせん階段）の概念、つまり既習の内容を「復習」を繰り返すことで理解の定着を図ることが重要である。この事を考えれば、フランス語文法の A-Z を 1 年間で終えることは不可能であろう。また学んだ文法事項から自己表現練習をすることで、学生がフランス語の授業を楽しく感じ、モチベーションを維持することができるだろう。また最後に行ったディクテでは、学生が今まで学んだ文法項目が身につけているのか把握することができた。文法の授業は無味乾燥であるとか、知識の詰め込みであるとの批判がある。問題なのは「文法の授業」ではなく、「文法の授業で文法だけを教える」ことである。文法の授業に自己表現やコミュニケーション、または聞き取りの項目を含めることで、学生のフランス語能力を上げるだけでなく、フランス語に対するモチベーションを高めることもできる。今後の文法教育に必要なのは「文法+ α （読む・聴く・書く・話す、フランス語圏文化 etc.）」ではないだろうか。